

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

縄文遺跡と交野

昭和 20～30 年代頃は大規模な開発も少なく、発掘調査は研究したい人が、個人や研究会で、短期間、僅かな面積を自力で掘るといった形で行われていた。

昭和 30 年代、交野市域でも考古学を愛する人々が集まり『交野考古学会』が結成され、片山長三氏のもと奥野平次・桜井敬夫・西尾宏氏などが集まり、発掘調査、研究会を開催するなど、活発な活動が繰りひろげられていた。

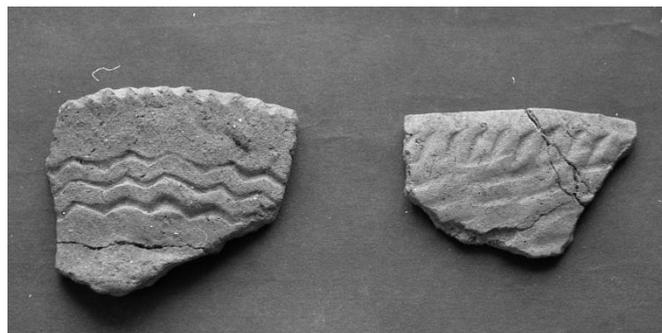
同年 12 月神宮寺の今堀半二郎さんの葡萄畑でフリントやサヌカイト片など石器の原材料をまた、当時四条躰高等学校生で伊藤只雄さんが神宮寺の谷の登り口、石仏付近で石鏃を発見した。



石器材料と石鏃

こうして神宮寺付近に縄文時代の集落があることが確実となり、遺跡は「神宮寺遺跡」と名付けられた。

また、同遺跡を 32 年から継続して調査を行い、会員が一片の土器片を採集した。



この土器片こそ、縄文時代早期の押型文土器なわめもん（縄文）がな

く貝や木で施文した約 1,2000 年前頃の土器であり、後にこの遺跡地名をとって「神宮寺式土器」と名付けられた。



神宮寺遺跡図

交野市史（考古編）より

写真・同好会資料

第一回神宮寺早期縄文式遺跡の発掘

片山長三

発掘にいたるまでの経過

今日までの交野方面でいくつかの古い縄文遺跡を発掘しつつ、その立地条件を考えると、けわしい山の谷が開ける外辺の扇状地則ち崩石層の丘上で手近に相当量の谷の清水が得られるところという点に帰着している。

このさしがねによって交野一帯の山麓を調査した結果、以前に寺村共同墓地の北、倉治の墓の東の小丘こそはとって少々試掘してみた、そしてここで土師器片を見たが、あまり笹が繁っていたのでそのままとなっている。

そしてその西の方倉治墓地東辺からサヌカイト片又は石鏃を出していた。この地点は是非一度は充分試掘を遂げたいと思いつつそのまま今に果たしていない。私の縄文式遺跡想定地である。

その後交野考古学会の活動がはじまり昭和 29 年 10 月倉治宮代池の調査時、桜井敬夫氏はこの付近で縄文式の石鏃を発見した。



宮田池(現・源氏池)

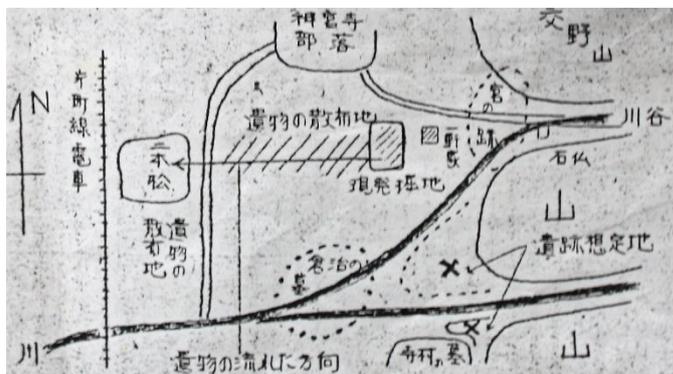


古代人もビックリ源氏池と第二京阪国道

同 30 年 12 月今堀半二郎氏の耕地葡萄畑(二本松)の表面採集でフリント及びサヌカイト片を見た。又かつて駿高考古学生徒伊藤只雄君が神宮寺谷の登り口、石仏附近で縄文式石鏃一個を得たのでこの附近に必ずこれらの石器を出した中心地たる縄文式遺跡はあるものと、その後幾度となく搜索していた。

本年 1 月 27 日当学会の一月行事として寺村墓地の西側発掘の時、私は西尾氏と共に葡萄畑一帯を歩いてサヌカイト破片等の地表に散布している跡を辿って見ると前記今堀氏の葡萄畑(二本松)から東へ登り谷の口の石仏の方へ一直線に続いているように思われた。

即ち、谷の口の上流にあった遺跡から何年頃かの大水で遺物を扇状地の西へ押し流したものと思われ、今後遺跡をさがすならばこの線上であろうと語り合った。



この発掘が終わって帰途、谷の口一軒家の下を通過した時畑の土の色が大変よろしく私達の目を吸いよせたのでこの線上の発掘は必要であると奥野氏等と話した。

3 月 24 日交野山B地区最終の発掘を終える頃雨が降り出したので急いで下山したが途中で雨も小降りとなりまだ時間も少々早すぎたので神宮寺の村へはいる前に去る一月の記憶をよびおこし一軒家の下を調べたいと思った。

すぐ近くのことであるので同地(現発掘地)の表面を一同が歩いてしみるうちに土師器片、瓦器片等があったが何となく黄色い砂が気がかりで去る事が出来ずにいると西尾氏がピックアップした一片に押型らしいものが見えた。こうして変電所へ帰ってから相談の結果学校の休みの関係上この休み中に掘ろうということにした。

発掘 昭和 32 年 4 月 4 日

集会した人々 桜井両氏、西尾氏、札野氏、山本氏及び発掘担当者 片山氏、奥野氏は会社の用事で残念ながら出られず先ず今堀氏を誘い同家老人と共に現地に行く一軒家の下は 2mばかり低い麦畑となっている。

北の一部は柿畑であったが柿は伐られて今は作物なしこの畑南は次第に高くなり又南やや低くなっている。私等の興味は作物のない柿畑ではなく南の方のゆるやかに小高くなった麦畑の土の色であった。

将来は葡萄畑とするために 5mおきに東西に葡萄の列を四列ほどできている。

この葡萄の植えられてあるところの地中は土を変えるために相当深く掘り返され、その時底の方から前記の土器片が出たものであろう。

今その中の最も中心と思われるこの畑の最高所にトレンチを設けることとする。

片山長三著

交野考古学会の活動からバトン

楽しく学ぶ素晴らしい雰囲気がある会を包み、真摯な会の活動を伝えるために会誌「石鏃」が刊行されていた。その名を継承した。

昭和47年5月20日交野古文化同好会発足の会報誌「石鏃」NO1（昭和47年6月15日発行）に

＝はじめに＝

会長 奥野平次

神宮寺という処は旧北河内の古文化の宝庫だとほめていただく。

南から北に流れた天の川と南と東から抱きかかえる様に伸びた生駒山脈と西に香里台地をひかえ、枚方で淀川に合流しているたたずまい、川は人を育て歴史を重ねて行くという言葉そのままの姿が交野市だ。

交野市から出土した遺物を守り、建設途上の土の中からの文化の跡を見失わないように、また大切な文化財を守り抜いてくれる次世代の人づくり、そのために学習を続けようとするグループづくりを長い間私の心の中で宿題となっていた。

五月二十日愈々発足した。この心をよい市づくりに生かしたい。

また、グループの中の交わりは新しい人と古い人とのよりよい人間関係に成長させたい。

将来交野市に博物館も作りたい。こんな願いで発足したのが交野古文化同好会である。



遺物台帳整理

出土土器を後世に伝えるために大切に保管しよう。それまでは、木箱のミカン箱に新聞紙にくるくんで入れ小学校等に分散して置いてあった（今思うとゾーっと）。それを一カ所に（資料館2階）集め整理することにした。この作業がなければ縄文土器などがなくなっていたかも？今、資料館に展示され、若い研究者のお役に!!!

奥野平次氏の思い

交野には大切な遺物があります。

神宮寺式の土器が考古学界の先生方のなかで縄文早期の土器、^{へんねん}編年解決の糸口として鍵をにぎっていることが注目されている。

このような学問的に価値ある遺物を失わないこと、そして出土地を書いておくことを基本に取組んだ。

多くの人が代わる代わるお手伝いに来ていただきました。

